

カラフトアイヌ供養・顕彰碑

■指定年月日／平成21年3月26日
 ■所在地／北海道松前郡松前町字
 松城303番地光善寺本堂前境内
 ■所有者／浄土宗高德山光善寺



カラフトアイヌ 供養・顕彰碑



部分拡大(裏面)

嘉永^{かえい}6年(1853)秋に、ロシア兵70名以上が樺太南部の久春古丹^{くしゅんこたん}(後の大泊、現コルサコフ)に要塞を築き、以後八ヶ月にわたって軍事施設を構築したという、「クシュンコタン占拠事件」があった。この石碑は、嘉永元年^{かえい}(1848)に72歳で没した惣乙名^{そうおとな}・キムラカアエノ^{とむら}を弔い、供養するために、脇乙名^{わきおとな}ハリハリホクンが清水平三郎の世話を介して建立したものである。その両側面には、ロシア軍占拠下の危機的な状況下であったにもかかわらず、現地に踏みとどまったカラフトアイヌの人々や、越年番人をソウヤに送り届けた和人に対して協力的な行動であった事と、それを行った人々の名が記され、全体として顕彰碑となっている。なお、供養・顕彰碑建立の中心的人物であった清水平三郎^{あんせい}は、安政3年(1856)に幕臣に登用され、同年六月に函館奉行所支配のクシュンコタン詰、調役下役出役を命ぜられていることから、この石碑はこの頃にクシュンコタン運上屋付近に建立されたものと考えられている。

この石碑がどのような経緯で光善寺に所在するのか不明であるが、当時の日口間の国境交渉にかかわる領土概念や、幕府の対ロシア、対アイヌ政策を知る上で、貴重な資料である。